バーンウェルト

Die Bahnwelt

シナリオ (第 1 版)

平沢 健一　　桑田 浩之

平成 4 年 2 月 10 日

原作·平沢　'91 8/20
修正·平沢　'91 1/17
追加·桑田　'91 1/18
校正·平沢　'92 1/26
編集·桑田　'92 1/26

目 次

1 舞台 **2**

2 登場人物 **2**

3 ストーリー **3**

プロローグ 3
導入 3
STAGE 1 廃都 Forecs (フォレクス) 5
廃虚の都市 5
神殿 6
STAGE 2 地下都市 Bartimoor (バルティモア) 7
地底洞窟 7
地底都市 8
STAGE 3 海底都市 Ferioul (フェリオール) 9
海底都市内部 9
海底都市上部 10
中央タワー 11
STAGE 4 天空都市 Rexor (レクサー) 12
天空都市上部 12
天空都市内部 13
STAGE 5 時空船 Lar Keior (ラーカイア) 16
Ending 17

4 解説 **18**

1 舞台

一万年前に時空間に消失した古代文明 “Verle a Zohll”(ヴェレアトール)

2 登場人物

- 主人公 ..... カノール・マクガイア
  トレジャーハンター。宝探しと命がけの冒険に燃える熱血漢。単純で無鉄砲な性格。
- ヒロイン ..... ラーニア・ハリモンド
  カノールの助手で明るく活発な女の子。主に情報収集や支援を担当する。
- サブヒロイン ..... エルテノ
  海底都市内部で発見され、カノールのパートナーとなる女性型アンドロイド。
  外見はほぼ人間と変わらず、人間的な感情も持っている。カノールに対して好意を抱くが、感情を表に出す事はない。
- ロボット ..... オーパー
  天空都市の脱出ポッド格納庫で、ラーニアによって再生された汎用ロボット。天空都市でのラーニアのパートナーとなる。
  外見は人間型ではないが、その話し方はきわめて人間に近く、口が悪い。
  その実体は小型人工知能ユニットであり、その部分だけ有ればボディは交換できる。
- 敵 ..... ゲーリー・マクマホイ教授
  古代文明の力を利用して、世界征服を企てるマッドサイエンティスト。目的のためには手段を選ばず、道徳や倫理といったものと無縁な男。性格は派手でプライドも高いが、卑劣でセコイ手段も平気で使う。

3　ストーリー

プロローグ

遥かな一万年の太古の世界に栄えた超古代文明。超科学と神秘の魔力によって支えられたその力は大地の形を変え、大海の流れさえも自在に操ったという。

人々はその偉大なる力を以て、新たな大地を創造した。我々の住む世界の近くにありながら、大きな壁によって隔てられた世界。時空間の狭間に創造されたその世界の名は「Verle a Zohll(**ヴェレアトール**)」。

その世界は住むべき主達がその力を制御するすべを失い、滅亡していった後も時空間を漂い続けている。

導入

大洋上に忽然と飛来した謎の飛行物体。

世界各都市の上層部は、外宇宙から侵入した形跡もなく、まったく突然出現した巨大船の情報に騒然とした。

いち早くこの情報をキャッチしたトレジャーハンター「**カノール**」は助手の「**ラーニア**」を連れて調査に向かった。

しかし、巨大船には「**ゲーリー教授**」も、自分の発明した飛行メカとロボットを引き連れ調査に向かっていた。ゲーリー教授は、世界征服を企むマッドサイエンティストで世界各国から指名手配を受けている男である。

ゲーリー教授は、特に古代文明の科学力を利用することによって、世界征服ができると考えていた。カノールは以前にもトレジャーハンティングの邪魔をされている。

独自の探検メカで現地まで飛び、巨大船の内部に乗り込んだカノールはゆっくりと明滅する巨大なエネルギー発生装置の設置されたホールの中で、エネルギー発生装置と共鳴する漆黒の金属板を発見する。

そこで巨大船が「**ラーカイア**」と呼ばれる船であること、時空を超えた世界「**ヴェレアトール**」からやってきたことを知り、さらに時空を超える超エネルギー「**ヴェルビアス**」の存在を知る。

その時、ゲーリー教授がロボットを引き連れて現れる。教授はカノールの持つ金属板を奪おうとする。

カノールとラーニアが教授に追われ、ラーカイアを脱出しようとした瞬間、ラーカイアは周囲の空間を巻き込んで再び時空転移を開始した。カノール達の探検メカと教授の探検メカは時空転移に巻き込まれる。

一瞬の暗黒と静寂。相対的に異なる時空への転移は、少なくともカノール達の固有時間にとっては極めてわずかな間に行なわれた。そして次の瞬間、彼等は時空都市ヴェレアトールにいた。

ヴェレアトールに転移したラーカイアはいずこへともなく飛び去っていった。

転移に巻き込まれたカノールの探検メカは廃都フォレクスの外れに墜落した。半壊した探検メカの中で意識を取り戻した二人は元の世界へ帰るためにも、ヴェルビアスを求める冒険を開始する。

STAGE 1 廃都 Forecs (フォレクス)

廃虚の都市

廃虚の都市。壊れかけた建物が林立し、大地は地震によってできたクレバス (裂け目) によって寸断されている。高度な科学文明と古代的な建造物が融合した都市。

崩れたビルの間からは小型メカ群が続々と湧き出ては襲いかかってくる。また、都市の各所に備えられたレーザー砲台も攻撃を仕掛けてくる。

クレバスを避けて進むと、都市中央にある巨大な軍事基地を抜けていく必要がある。軍事基地内に侵入するには、正面入口から侵入する方法と、裂け目から侵入する二つの方法がある。

軍事基地内部には、多くの兵器と都市のマザーコンピュータにつながる端末があり、情報を得ることができる。ラーニアが端末から情報を検索する。(図 1)

- 都市のマップ
- マザーコンピュータに直接アクセスしなければ、ヴェルビアスに関する重要な情報は得られない事
- 都市のマザーコンピュータが神殿内部にある事

図 1: 端末から得られる情報

情報をここまで引き出したところで警報が鳴り、都市のマザーコンピュータから都市住民[1]に対するメッセージが伝えられる。(図 2)

メッセージはゲーリー教授の小型メカが都市に与えた損害により、自動防衛機能が活性化したことを示すものであった。

二人が兵器庫をでて神殿に向かうと、再び小型メカが襲いかかる。また、神殿への道はクレバスに加えて防衛システムにより作動したシャッターに遮られ、そのほとんどが通行不可能になっている。

神殿への残された唯一の道には、大型自動砲台が設置されていて、強力な武器がなければ破壊できない。大型自動砲台を破壊し、さらに進むと神殿があるが、神殿の入口で **ID カード**の提示を要求される。

ID カードを持っていない場合、猛烈な攻撃を受けることになる。猛攻の中を強行突破するか、廃虚に戻って **ID カード**を捜索することが必要となる。

[1]マザーコンピュータは、この都市に生きていた住民は遠い過去に絶滅した事を知らない。

神殿

神殿はいわばヴェルビアスの力を象徴化、神格化したもので、都市が機能していた時代には施政者の庁舎や議事堂を併用していた。

神殿内部には多数の偶像が随所に立ち並んでいる。偶像の中には、進路の妨害、侵入者への攻撃、宝箱の監視などの役割を持ったものもある。また、常に神殿の回廊を徘徊し、侵入者に攻撃を仕掛ける偶像もあり、これを破壊しながら進まなくてはならない。

最初の時点では、偶像に阻まれ進めないところが数カ所あるが、倉庫で**信者の印**を発見すると、一部の偶像は友好的になり、進路妨害をやめて、マザーコンピュータまで進めるようになる。

- 正体不明の小型メカが都市に多数侵入した事により、都市自動防衛システムが発動した事
- 都市自動防衛システムにより、町の各所が分断され、各種のトラップが動きだした
- 都市自動防衛システムにより、**ID カード**を持たずに神殿にはいると攻撃される
- 携帯型兵器の多くは町の各所に分散して配置してあり、都市住民はこれを利用して迎撃に当たる事
- 強力な武器の保管場所

図 2: マザーコンピュータからのメッセージ

マザーコンピュータへ向かう回廊を**信者の印**を持たずに進んだ場合は、回廊の途中にある偶像が再三にわたり警告を発する。

> 「信者の証を持たざる者よ。この場より立ち去れ！」
>
> 「繰り返す、信者の証を持たざる者よ。この場より立ち去れ！さもなくば、死あるのみ！」

警告を無視して進んで行くと、マザーコンピュータルームの扉の前で、そこに立っている偶像が不気味に笑い[2]、回廊が両側からせり出してきて押しつぶされる。

神殿奥には、都市の全ての管制制御を行うマザーコンピュータルームがある。マザーコンピュータに直接アクセスを行う事で情報を得る事ができる。

漆黒の金属板をコンピュータにセットすると、ヴェルビアスに関連した情報のロックが解け、情報を引き出す事ができる。(図 3)

[2]考えるだけでも恐ろしい

マザーコンピュータにヴェルビアスの正体を訊ねても答えない。ただ、その使い方を誤らぬように警告を発するのみである。

マザーコンピュータルームを抜けて進むと、ある部屋で立ち並ぶ強力な偶像に道を阻まれる。偶像の攻撃は強力で、強行突破は不可能に近い。しかし、部屋の左側には、一段高くなった場所があり、そこからなら攻撃を受けずに破壊できる。別の道を回ってそこに出る事が可能である。

さらに奥に進むと行き止まりになる。しかし、そこまでに偶像の立ち並ぶ回廊があり、偶像に対して攻撃をかけると動きだして反撃してくる。

実は、偶像の一つは地下通路への隠された入口となっていて、その偶像を破壊することにより地下通路に進むことができる。

地下通路を進むと、やがて道が開けて広いホールとなる。ホールの奥には、巨大な神像が待ちかまえている。

神像を倒すと地の底へ続く深い洞窟が見つかる。

- ヴェルビアスは天空都市レクサーにある
- ヴェルビアスを手に入れるためには、**漆黒の金属板**と、もう一つ**光ディスク**が必要である
- **光ディスク**が地下都市バルティモアにある
- 神殿のどこかに地下都市バルティモアに続く地下通路がある

図 3: マザーコンピュータから得られる情報

STAGE 2 地下都市 Bartimoor (バルティモア)

地底洞窟

神殿を抜け、地底洞窟に入り込んだ二人。

地底洞窟は複雑な迷路となっている。地底洞窟内には地底のモンスターや、古代の戦いで放たれた対人攻撃ロボット[3]が徘徊する。

モンスターの中には、普段岩に化けているものもいる。落とし穴や、近づくと転がり出して人を押しつぶす大岩などの罠が、二人の前進を妨害する。

地底洞窟は各所で地底水脈によって途切れている。しかし、その地底水脈に飛び込むと水流に流され、新たな道にうちあげられる。

大岩の中には弾を打ち込むと動き出すものがある。動きだした大岩は地底水脈に落ちて、橋の代わりとなる。また、滝の裏側には安全地帯がある。

[3]倒れても倒れてもやつは起き上がってくる･･･ことはない

地底洞窟の奥深くに進むと、全身を堅い甲殻で包んだ巨大甲虫が二人に襲いかかる。強烈な体当たり攻撃に耐えて甲虫を倒すと、その巣の中で様々な武器やアイテムを発見する。その中から**金属探知機**を手にいれた二人は、地底洞窟内に異常な金属反応のあるところを発見する。

金属反応のある壁を破壊するとその向こうには、地底都市バルティモアがあった。

地底都市

地底都市の上層部にたどりついた二人はそこで、ヴェレアトールを創造した古代人類の子孫に出会う。彼らはかつての文明の遺産の一部を使用していたが、それを産み出す力はすでに失われて久しかった[4]。

彼らは、カノール達が洞窟のモンスターを倒してくれた事に喜び、二人に対して好意的に対応する。二人は、地底都市の住民の長老から、**光ディスク**とヴェルビアスに関する情報を得た。(図 4)

- 天空都市レクサーの具体的な位置は不明である事
- 物質転送システムを使用すれば、天空都市レクサーに行ける可能性がある事。
- 地底都市下層部の奥に転送ルームがあるが、転送先は不明である事。

図 4: 長老から得られる情報

二人は、長老の情報から地底都市下層部の転送ルームに賭けてみる事にする。

地底都市下層部は、都市自動防衛システムが暴走していて、レーザー砲やガードロボットなどの攻撃兵器が二人を襲う。転送ルームまでの道程は激しい攻撃がずっと続くが、途中にある武器庫では、エネルギーユニットの補充ができる。

猛攻の中を突破して転送ルームにやってきた二人の前で、転送ルームの壁を突き破り巨大地底メカが現れる。地底メカに乗り込んでいるのはゲーリー教授だった。教授は、二人にヴェルビアスの秘密をよこせと迫り、攻撃を仕掛けてくる。二人は激闘の末地底メカを破壊するが、教授はさっさと脱出して逃げ去ってしまう。

そして転送システムを起動した二人は、白い光に包まれ地底都市をあとにする。

[4]彼等の生活は恐ろしく神格化されている。さもなくば数千年もの間文明を存続させることはできなかったろう

STAGE 3 海底都市 Ferioul (フェリオール)

海底都市内部

転送システムによって送り出されたところは、一面に腐臭の漂う湿気の多い都市であった。転送システムは、二人を受け入れると最後の力がつきたかのようにエネルギーの流入を停止した。

転送ルームを出て広大な全周型ラウンジに出たとき、二人はようやく自分たちのいる場所を理解した。ここは海底都市なのである。

二人は海底都市からの脱出路と天空都市への道を求めてさまよう。海底都市内部には水棲生物が徘徊し、二人を攻撃する。二人が転送された転送ルーム内には、モンスターが入れないので、安全地帯となる。

海底都市内部の都市自動防衛システムは、ほとんどモンスターに破壊されている。海底都市内部には海水が侵入している部分があり、二人の進行を妨げる。広大な内部を捜索すると、やがて二人は脱出用小型ポッド群が設置してある格納庫を発見する。

ラーニアがポッドの脇にある端末を操作した結果、ポッドの行先は天空都市レクサーである事が判明する。カノールは脱出ポッドでレクサーをめざす事を決意し、まずラーニアをポッドに乗せて発進させた。

そして、自分もポッドに乗り込もうとしたところで、不意に格納庫の壁面が崩れ、モンスターが現れる。モンスターはカノールに向かって襲いかかり、その途中で端末を破壊する。カノールは向かってくるモンスターを倒すが、もはや天空都市に行くすべは失われてしまう。

そして、一人になったカノールが崩れた壁をくぐり、先へ進むと研究室があった。研究室では、ロボットやアンドロイドに関する研究が行われていたらしく、人型のパーツや擬似生命装置、プロトタイプと思われるロボットなどが散乱していた。

そして研究室の奥には、一体のアンドロイドを格納したカプセルがあった。カノールがカプセルにふれるとカプセルは点滅を始め、やがて上部がゆっくりと開き、意志を持ったアンドロイド**エルテノ**が長い眠りから目覚めた。

エルテノは彼女を目覚めさせたカノールを「マイン」と呼び、カノールを助けるパートナーになる。エルテノはカノールに自分の知る海底都市の情報を伝える。(図 5)

エルテノの情報を元に都市管制室をめざすカノール。

だが、都市管制室への道は完全に水没していた。都市を捜索し潜水服を手にいれた二人は、水没した通路に飛び込み、再び都市管制室をめざす。

水中を進む二人に、巨大水棲生物が襲いかかってくる。巨大水棲生物は二匹いて、一匹は都市管制室への通路を塞ぎ、もう一匹は二人を執拗に追い回す。しかも、水中ではほとんどの武器が使用できず、二人は逃げ回るしかない。

- 海底都市の上部にそびえる中央タワーの最上層部に天空都市へのシャトルがある
- 現在の地点から中央タワーには進めない
- 海底都市は海上に浮上する事ができる
- 浮上した海底都市を出て外から中央タワーに侵入できる可能性がある
- 海底都市を浮上させるためには、都市管制室に行く必要がある

図 5: エルテノから得られる情報

二人は水中を追い回され袋小路に追い詰められるが、そこに水中用の武器を発見する。間一髪で武器を手にいれた二人は、追いすがってきた巨大水棲生物を倒す。そして、通路を塞いでいた巨大水棲生物も倒した二人は都市管制室への侵入に成功した。

エルテノが都市の動力を復活させ、空間スタビライザー制御システムの操作を始める。やがて、激しい振動とともに高周波を伴った機械の動作音が聞こえ、わずかに傾いていた海底都市フェリオールは安定を取り戻した。

エルテノの「浮上します」という声に続いて高周波はさらにその響きを増していき、海底都市はゆっくりと浮上を開始した。二人は都市管制室内のエレベーターを使い、海底都市の上に出る。

海底都市上部

エレベーターを降りると海底都市の上にあるビルのひとつに出た。

長い年月海底となっていた都市上部には、腐食した建築物が残っている。建築物のほとんどは入口が腐食して中にはいる事もできないが、一部の建築物は入口を破壊して内部に入る事ができる。中には、武器、エネルギーユニット、隠し通路などがあることもある。

二人は中央タワーを目指して海底都市の上を進んで行くが、海底から一緒に持ち上げられた水棲生物が攻撃してくる。また、中央タワー付近の都市自動防衛システムやガードロボットの中には、一部作動するものがあり、その割合は中央タワーに近づけば近づくほど多くなる。

二人はモンスターの妨害を切り抜け、中央タワーの入口まで達するが、入口は閉ざされている上に、付近は強力なガードロボットや砲台などに守られている。特に入口に備え付けられている砲台は強力で、容易には破壊できない。

二人は砲台の発射する敵弾をかわしつつ、入口を破壊して内部に侵入する。あるいは、海底都市の建築物の中にある隠し通路[5]を発見して、内部に侵入する事もできる。

中央タワー

タワーの入口付近には武器庫がある。タワー内部にはエレベーターがあり、これを利用してフロア間を移動する。中央タワー内部は都市自動防衛システムが完全に作動していて、多数のガードロボットと攻撃兵器が二人を追う。

二人は都市自動防衛システムの妨害を突破して、ついに天空都市へ向かうシャトルを発見する。が、しかしシャトルにはエネルギーが不足していた。

二人はシャトルを発射させるため、都市自動防衛システムの制御ルームを占拠し、エネルギーをシャトルに注入しようと試みる。また、遠くで爆発音がしてタワーが振動するが、この時点では何も起きない（ゲーリ教授出現の伏線）。爆発音と振動は、この後も時折発生する。

制御ルームはシャトルの近くにあるが、扉は頑丈なシャッターで遮られているので、かなり迂回して別の扉を探す。制御ルーム付近はタワー内部でも特に攻撃が激しい。さらに、制御ルーム前のフロアには巨大ガードロボットがいる。巨大ガードロボットを倒すと制御ルームにはいる事が可能になる。

エルテノがシャトルにエネルギーを注入し、さらにシャトルに近い扉のロックを解く。この時、二人が入ってきた扉の付近が爆発し、教授の飛行メカの先端部分が部屋に突入する。先ほどから頻繁に発生していた爆発音と振動は、ゲーリー教授がタワーの外から攻撃を仕掛けてたのであった。

しかし、同時に制御ルームのコンソールも火花をとばし、タワー全体が激しい振動に襲われる。ゲーリー教授の手あたり次第の攻撃の結果、タワーが崩壊し始めたのだった。慌ててゲーリー教授達は脱出し、カノール達もシャ

[5]容易には発見できない

トルへ急ぐ。カノールがシャトルに乗り込むと、エルテノは搭乗ハッチをロックしてしまう。

実はシャトルは、制御ルームで操作する人間がいなければ発射できない仕組みになっていた。エネルギー注入時にそのことを知ったエルテノは、カノールを脱出させるために、ただ一人残ってシャトルの発射操作をするつもりだった。

カノールがロックされた扉を叩くが、扉は開かない。激しい振動が続き、シャトルに架かっている橋が徐々に崩れ、その上をエルテノが制御ルームへ走る。制御ルームにたどり着くエルテノ、周囲を爆発が包む中で発射操作を進めていく。

やがてシャトルは轟音とともに飛び立ち、空高く消えていく。

STAGE 4 天空都市 Rexor (レクサー)

海底都市から飛び立ったシャトルは雲海の中を突き抜け、成層圏に浮かぶ銀色の巨大な球体をめざす。

それこそ天空の孤島、**天空都市レクサー**であった。天空都市は球形の外殻の上部を破壊された状態にあり、そこから内部のビル群などの都市の一部の姿をかいま見る事ができる。天空都市とは、その球体の中に一つの都市を取り込んだものだった。

やがて、シャトルは壊れかけた侵入路から天空都市に入り、都市にある飛行場に着陸する。

天空都市上部

エルテノを失ったカノールの心の中には疑問が生じていた。

> ヴェレアトールの高度な科学技術。地中に、海底に、空中に都市を建造する力を持ちながら滅び去った文明。どの都市にも戦いの影がみられ、大量の兵器があった。
>
> そして、地下都市の片隅で、かつての科学文明とは隔絶し、戦いとは無縁な生活を営んでいるヴェレアトールの末裔達。
>
> ヴェルビアスを発見し、その力を人類にもたらす事が、本当に人類にとって良い事といえるのであろうか。

内心の疑問を打ち消し、カノールは再び進み始める。

天空都市上に降り立ったカノールは、海底都市の脱出ポッドによって到着しているはずのラーニアを探して、ビル群の中をさまよう。ここでも都市自動防衛システムとガードロボットに苦しめられるカノール。都市の中でも最

大の建物の中で、コンピュータ端末を発見したカノールは脱出ポッドを収容する格納庫の位置を知る。格納庫は都市の地下部分、つまり天空都市の内部にあった。

カノールはコンピュータ端末を操作し、その建物にある地下通路のゲートを開き、その中に突入する。ゲートは地下通路に突入した途端、カノールの背後で閉じてしまう。地下通路は直線状に長くのびていて、その奥にはこの通路を守るガードロボットが待ち構えている。

ガードロボットは巨大なキャタピラを装備し、地下通路の横幅いっぱいの大きさを持つ。ガードロボットはカノールを攻撃しつつ、じりじりと前進する。カノールは攻撃を回避しつつ、追い詰められる前にガードロボットを破壊しなくてはならない。ガードロボットを破壊し地下通路を突破したカノールは、脱出ポッドの格納庫を捜して天空都市内部へ進んでいく。

天空都市内部

＊＊＊ 時間はさかのぼる ＊＊＊

ラーニアを乗せた脱出ポッドは天空高く舞い上がり、銀色の球体天空都市レクサーに到達する。そして脱出ポッドは天空都市内部の脱出ポッド格納庫に格納された。

ラーニアは、海底都市に残されたカノールの身を安じつつも、彼が天空都市にやってくる事を信じて、それまでに元の世界の帰る方法を見つけだそうと決心する。

その時、ラーニアに話しかけるものがいた。ラーニアに声をかけたのは、手のひらに乗るくらいのカセットのような精密ユニットだった。それはロボットの頭脳にあたる人工知能ユニットであった。人工知能ユニットは「**オーパー**」と名乗り、ラーニアに自分の体を組み立ててくれるように頼む。

ラーニアは周りに散乱してしているロボットのパーツを組み上げて体にオーパーの人工知能ユニットをセットした。活動を再開したオーパーはラーニアのパートナーとなる。

天空都市の情報を持つオーパーは、ヴェルビアスを手にいれなくても時空を超えて元の世界に帰る方法がある事を、ラーニアに教える。天空都市のマザーコンピュータルームには、人間を時空を超えて転送する装置「**ヴェルテバルム**」が設置されているのである。

続々と現れるガードロボットを破壊して、マザーコンピュータをめざすラーニア。だが、マザーコンピュータルームへ続く通路には、エネルギーシールドが作動していてシールドにふれた物を灼き尽くす。

ラーニアはエネルギーシールドを解除するためシールドジェネレータを探す。シールドジェネレータに進む通路には、カノールが遭遇したものと同じ型の通路を守るガードロボットがいる。ガードロボットを破壊して、シールドジェネレータまで到達したラーニアではあったが、シールドジェネレータ自体もエネルギーシールドに囲まれていた。

ここでオーパーがエネルギーシールドの中へ突入し[6]、ボディが灼かれながらも前進し、エネルギージェネレータを破壊する。エネルギージェネレータは破壊したものの、ボロボロになったオーパーは沈黙して動かない。駆けよるラーニアの目前で、オーパーは「ボン！」とはじけて煙を吹く。

オーパーの死に悲しむラーニア。

しかし、ラーニアの耳にあのオーパーの元気な声が聞こえてくる。オーパーの人工知能ユニットは無事だったのだ。ラーニアはボロボロのボディから人工知能ユニットを取り出し、共にマザーコンピュータルームを向かう。

マザーコンピュータルームにたどり着いたラーニアはオーパーの助けを借りながらコンソールを操作し、情報を引き出す。するとディスプレイに、天空都市内部にたどり着いたカノールが映し出される。

ラーニアはカノールのもとに駆けつけ、二人は再会する。カノールは突然現れたラーニアに驚くが、お互いの無事を喜び合う。カノールはラーニアに案内されてマザーコンピュータルームに行く。再びラーニアはコンソールを操作し、情報を引き出す。(図 6)

- ヴェルビアスの力とは時空間を自在に移動し、平行世界を創造する力である
- 天空都市レクサーは、それ自身が時空間を超える船であること
- 天空都市レクサーと時空船ラーカイアが一つとなった時、ヴェルビアスはその力の全てを引き出す事ができる

図 6: マザーコンピュータから得られる情報

[6]オーパーは飛行体である。

さらに、マザーコンピュータはヴェルビアスの情報ロックの解除キーとして光ディスクをセットするように求める。光ディスクをセットすると、彼らの前に一万年前のヴェレアトールのホログラム映像が浮かび上がった。

> 神秘の魔力と超科学技術に支えられ、栄華を極めたヴェレアトールの人類は、二つの勢力に分裂し争っていた。
> 彼らの持つ時空間を操作する力はその姿を変え、悪魔の兵器となった。ヴェレアトールを創造した力が、兵器となったとき、その力は時空間をねじ曲げ、多くの都市とそこに住む人々を呑み込み、時空の狭間に消し去った。
> しかし、ねじ曲がる時空間の嵐は、とどまることを知らなかった。時空間の狭間に生まれたヴェレアトールそのものが時空間の歪みの影響により崩壊していった。
> 高くそびえる山脈が流砂のごとく崩れさり、大気はプラズマの嵐となり、海は煮えたぎる熱湯となった。
> 長い歳月によって築き上げられてきた超科学文明ヴェレアトールは数日で崩壊した。

また、同時にカノールの持つ**漆黒の金属板**が輝き、彼らに語りかける年老いた声が聞こえてきた。

> 汝らの前に、時空の道を拓く船ラーカイア現われり
> ラーカイアを統べるものは、その深奥に秘められしヴェルビアスの力を得ん
> その力、時空の壁を破り、道を拓く
> その力、世界を創造する。その力、世界を滅ぼす
> 偉大なる創造の力は、大いなる破壊の力
> 明記せよ
> ラーカイアは未来を拓く光の力、ラーカイアは破滅をもたらす闇の力

そして、マザーコンピュータはヴェルビアスの全ての力を発動させるつもりならば、**漆黒の金属板**をセットするように求める。

カノールの心の奥底でわだかまっていた疑問は晴れた。カノールはヴェルビアスはまだ人類が扱うには強大すぎると考え、その力を甦らせることをあきらめて、時空転送ルームを使って元の世界に帰る事にする。そして、二人が時空転送ルームへ向かおうとしたとき、背後で爆発が起きた。

二人は爆発の衝撃で吹き飛ばされ、気を失い倒れてしまう。薄れいく意識の中で、カノールは煙の中から現れた男を見た。爆煙の中から現れた男は、死んだと思っていたゲーリー教授だった。ゲーリー教授は多くのロボットやアンドロイドを従えていた。教授は**漆黒の金属板**をカノールから取り上げ、ヴェルビアスを発動させる。

やがて、天空都市全体が振動し天空都市の下部が開く。そこから地上に向かって光がほとばしる。天空都市から放たれる光は地上に達する前にはじけ、時空の彼方より時空船ラーカイアを呼び寄せた。

突如として現れたラーカイアはそのまま上昇し天空都市の下部に吸い込まれていく。やがて、天空都市レクサー全体に光がともり始め、天空都市は本来の機能を回復する。時空間をさまよっていたラーカイアこそが、天空都市の巨大な動力炉だった。天空都市にその巨大な動力炉としてラーカイアが戻った事により、時空間を自在に操る力が甦った。

教授は哄笑しながら、コンピュータルームからラーカイアにむかうエレベータに乗り込んでいく。ラーカイアのヴェルビアス制御ホールに乗り込んだ教授は、その力を試すために、海底都市フェリオールを時空の狭間に消し去る。海底都市を不意に黒い球体が包み込み、その内部で海底都市が崩壊していく。やがて、黒い球体は急速に収縮し、後には何も残らなかった。

やがて、オーパーの声によって意識を取り戻した二人は、ヴェルビアスの力により、海底都市の崩壊していく姿を見る。二人は、教授がヴェルビアスの力を操ることを阻止するために、ラーカイアに乗り込む。

STAGE 5 時空船 Lar Keior (ラーカイア)

マザーコンピュータルームからラーカイア船内は直通エレベータで直結しているが、エレベータ出口からヴェルビアス制御ホールまでは直線状の長い通路がある。その途中では、教授の置いていったロボットが二人の行く手を阻む。ロボットを撃破し進んで行くとヴェルビアスの制御ホールの前で、頑丈な扉に進路を阻まれる。

そしてさらに、二人の行く手を 1 体のパワードスーツが遮った。二人の前に立ちはだかったのは、かつてのパートナー、エルテノだった。パワードスーツを装着したエルテノは、無表情で瞳の色を失っていた。エルテノは無言で顔の部分を覆うバイザーをおろし、二人に襲いかかる。エルテノは教授によって改造され、パワードスーツを装着した殺人マシンとなっていた。

断腸の思いでエルテノと戦うカノール。ついに顔を覆うバイザーが砕け、エルテノは倒れる。そしてエルテノの眼に意志の光が戻る。傷ついたエルテノを助け上げるカノール。

その時、激しい振動が起こる。ついに、教授がヴェルビアスの力を無制限

に使い始めたのだった。天空都市から強烈なプラズマがほとばしり、プラズマにふれた全てのものを消滅させていった。やがて、ほとばしるプラズマは天空都市レクサー全体を覆い始めた。

ヴェルビアスの暴走が始まった。船内にも異常が起きていた。あちこちにプラズマが走り、残ったメカ等を破壊し狂わせていた。オーパーはラーニアにヴェルビアスの暴走が始まった兆候だと警告し、天空都市そのものを消滅させるしか暴走を止める方法はないと告げる。

カノールは武器で制御ホールの扉を破壊しようと試みるが、まるで歯がたたない。その時、傷ついたエルテノが立ち上がりカノール達を後方にさがらせる。そして自分は制御ホールの扉の前で自爆する。エルテノの犠牲によって制御ホールの扉に穴が開く。カノールは、エルテノの爆発により開いた穴から制御ルームに突入する。

教授は、エルテノの死で怒りに燃えるカノールを嘲弄し、巨大なパワードスーツを装着し襲いかかってくる。ヴェルビアスの暴走が進む中、最後の対決が始まる。

Ending

教授を倒したカノールは、オーパーが指示した通りに天空都市そのものをヴェルビアスの力によって消滅させるようにラーカイアの自動装置をセットする。カノールはラーニアと共に天空都市のマザーコンピュータルームへ駆け込み、時空転送装置ヴェルテバルムを作動させる。

二人は白い光に包まれ、光にとけ込むように消えていく。その瞬間天空都市レクサーの崩壊が始まった。

銀色の天空都市が黒い球体に包まれ、歪曲した空間のエネルギーがその中の全ての物質を崩壊させていく。やがて黒い球体は周囲の物質をわずかに引き込みながら、ゆっくりとそして急速に時空間の特異点に向けて収縮を始めていった。

激しい重力震が周囲を揺さぶり、爆縮が最高点に達した時···

そこには何一つ残らなかった。

End.

4 解説

時空都市 “Verle a Zohll” は主人公たちがいる世界 (宇宙) から位相幾何学的に分離したベビー宇宙であり、通常の世界のすぐ横[7]を不安定な軌道[8]をたどりながら平行して進化する世界である。

ここで注意しておくべき事は “Verle a Zohll” は決して無から作り出された世界ではない。“Verle a Zohll” が創造された時、そこは元々の宇宙に属する空間の一部であった。それが “Verl Bious” の力によって時空連続体から切り放され、事実上もとの世界から消滅した世界なのである。戦乱期において、“Verl Bious” が他の世界を消滅させる兵器となりえたのはこれでおわかりのことだろう。

“Verle a Zohll” は六次元的には Warm Hall によって繋っている。しかし “Verle a Zohll” に移動するために Warm Hall を利用することはできない。なぜならそれは六次元の移動すなわち “Verle a Zohll” が創造された過去に戻らなければならないことを意味するからである。“Verl Bious” は時間軸に対する移動を限りなく 0 に近づける事は可能だが、これを負の方向に遡ることはできない。

そこで結局 “Verle a Zohll” に行くには自らを “Verl Bious” Field によってもとの時空連続体から切り放し、“Verle a Zohll” に引き寄せるという方法をとる。空間の移動をコントロールするのは、“Verle a Zohll” の方である。

“Verl Bious” によって消滅した空間は単にもとの時空連続体から切り放されたにすぎないので、このまま進化を続けるか、やがてはもとの空間に復帰するなどの未来も考えられるだろうか。(もしそうなら、我々は容易に新しいストーリーを発展させることができる。消滅した世界は着々と復讐の準備を進め、永劫の未来の後に訪れる再融合によってもとの世界にすむ人々と新たな敵との戦いが繰り広げられるのである。)

残念ながらこの想定は破棄されるべきである。位相幾何学的に考えると、一度分離した世界が再融合した場合、六次元時空連続体のトポロジーが増えてしまう。“Verl Bious” が空間のトポロジーまで変えてしまうようなものでない限り、分離した世界は二度と再融合することはなく、必ず時間的にも空間的にも本当に消滅すべき運命を持つ世界なのである。

“Verl Bious” が兵器として用いられた際、元々その世界を消失させることが目的である以上、その世界を安定させるほど充分な空間を与えなかったことは事実である。これらの世界は分離してしばらくの間存在を続けられたとしても、空間の曲率があまりに大きく人間の生存は不可能であったし、ほとんどわずかな時間で世界は縮小し時空連続体から消失していった。

“Verle a Zohll” を含む宇宙は充分な空間的余裕があることと、この世界に “Verl Bious” を持つことなどから、比較的安定した世界を保ってきた。

この世界の物理法則はもとの世界とは少々違ったものになる。例えばこの世界では空間の曲率が通常より大きくなり、三角形の内角の和は 180° にならない。重力定数が多少大きく、もとの世界に比べて時間はゆっくり進んでいる[9]。

主人公たちのいる世界では一万年の時間が過ぎているわけだが、“Verle a Zohll” の住人等にとっては大体 2~3 千年の時間しかたっていない。それでも高度文明が崩壊し、神格化した文明に退化するには充分である。なぜなら高度文明は何千年もかけて発達するものではない。わずかな科学的革命によって爆発的な進化を起こし、あまりに多くの技術的累積に基づいたものであるがゆえに、極めてもろい

[7] ただし五次元の空間的に見て

[8] 今風に言えば「カオス」的な軌道である

[9] あまりゲームに影響を与えるほどのものではないが

文明が築かれてしまうのである[10]。

ましてや戦乱期を迎えたとあっては、その文明を維持する若者の教育などとても充分に行なえたとは言えないだろう。“Verle a Zohll” の高度文明は事実上 (現地時間において) 数百年で崩壊した。ひと事ではない。我々の持つ低レベルな文明も隕石、核戦争、地殻変動など、崩壊する要因などいくらでも存在する。さて 1999 年には何が落ちて来るのだろうか。

“Lar Keior” は “Verl Bious” によって時空間を移動できる唯一の船である。この船の目的は、本来はもとの世界と “Verle a Zohll” との輸送や通信に使われたのであるが、現在では自動プログラムにしたがって “Verle a Zohll” がもとの世界の時空間座標を測定するために定期的に派遣されているのである。というのは、もとの世界からはよほどの偶然でもない限り “Verle a Zohll” を発見することはできない。“Verle a Zohll” が創造された直後にはその時空間座標を予測することもできたのだが、不確定性がその誤差を予測不可能なまでに広げてしまっている。“Verle a Zohll” の方では “Lar Keior” を派遣することでその誤差を定期的に補正しているのである。

“Verlte Balumn” は原理的には “Lar Keior” の時空転移と同じ動作をするものである。“Lar Keior” による計測が行なわれたばかりなので、かなり正確にもとの世界の空間座標に転移することができる。とはいっても転移した先で地面にめり込んではかなわないので、誤差を含めて地上数メートルの位置に転移させられた二人は、あまり怪我をしていなければ良いのだが。

最後に “Verle a Zohll” の未来についてだが、先に述べたように “Verle a Zohll” を含む宇宙もだんだんと小さくなりやがて消滅するべき世界である。ただ “Lar Keior” の “Verl Bious” を失ったものの、“Verle a Zohll” は充分な空間的大きさがあるために、まだまだ数十億年は存在を続けることができる。数億年先になると遠くの星は青方遷移を起こし、世界は異常に明るくなり、最終的にビッグクランチを起こして消滅する。それまでに再びこの世界を訪れる機会があるかもしれない。(K)

[10]我々から電気を取り去った生活を考えてみれば良い